

できないという事は 知識や能力の不足じゃない。 執念の欠如である

しげた・みつやす——1965年鹿児島県生まれ。1988年福岡にある東和大学(現・純真学園大学)卒業後、単身渡米。1992年新撰組グループ第1号店となる「新撰組焼鳥本店」をオープン。その後、ちゃんこ茶屋、博多ラーメン、総菜屋、しゃぶしゃぶ、博多ホルモンなど、多彩な店舗展開を果たす。2004年日本初進出となる「誠(まごころ)本店」を東京・御茶ノ水にオープン。現在は日米併せて16店舗を運営している。



日本から海を越えて十時間。アメリカ・カリフォルニア州を中心に日本食レストランを十四店舗運営している「新撰組グループ」は、当地で絶大な人気を誇っている。創業者の重田光康氏は二十二歳の時、徒手空拳で渡米し、様々な逆境を乗り越え、今日まで事業を発展させてきた。異国の地で闘い続けた重田氏の二十七年間の歩みは、まさに「力闘向上」そのものである。ロサンゼルスにあるオフィスを訪ね、「道を切り開く心得」や「リーダーの条件」などについて迫った。

職場とは人間育成の道場である

——こちらに掲げられている理念を拝見しておりますが、実に素晴らしいですね。アメリカに居ながらも日本人の魂が感じられて、

熱いものが込み上げてきます。重田 「世界一の気合とまごころのこもった店づくり。職場を通じ社会貢献できる豊かな人間育成道場。」これは我われ新撰組グループの理念で、ここにある和太鼓を叩きながら朝礼で唱和する。日本人の精

神って太鼓のビートとマッチするじゃないですか。各店舗でも同じようにやっているんですけど、日本語を喋れない現地のアメリカ人たちが覚えて唱和しています。

——職場は人を育てる道場だと。

重田 そう。挨拶一つにしても、人間力を高める場なんです。うちのスタッフは必ず店に入る時、「きょうも一日よろしくお願いします、帰る時には「ありがとうございます」って挨拶をします。店は日本の食文化を伝える神聖な場所であり、お客様との大事な触れ合いの場です。さらに言えば、生活の基盤であり、自分を高めるところでもある。

私は、挨拶とは気の交換だと思っています。お客様が仕事帰りで疲れていても、気持ちのいい挨拶ができれば相手の気を高め、明日への活力を与えられますからね。

——現在、新撰組グループはどのくらいの規模なのですか。

重田 カリフォルニアに十四店舗、東京にも二店舗あります。店の種類は焼鳥、ラーメン、ちゃんこ鍋、しゃぶしゃぶ、寿司と様々ですね。売上高は円換算で二十五億円程度、従業員は全部で三百五十名ほ

どいます。店を始めた頃は日本人だけでしたが、いまは四分の一が日本人で、あとは現地のアメリカ人を雇用しています。そういう中で、この理念に基づいて人材育成に日々力を注いでいるところです。

両親の生き方から学んだ人生訓

——重田さんが渡米されたきっかけをお聞かせください。

重田 話せば長くなりますが(笑)、私の生まれは鹿児島県の徳之島という、世界地図にも載っていない小さな離島なんですけど、そこに中学まで住んでいました。

徳之島は闘牛が盛んなところで、私の親父は土建業を営む傍ら、町議と闘牛会長を務めていたんです。それで小学校一年生の時、二つ上の兄貴とともに、ペット代わりに子牛一頭を与えられました。もう雨が降ろうが台風が来ようが、三百六十五日、休みなく世話をしなきゃいけないわけですね。

学校から帰ってくると、指定の場所へ行き、餌になる草を作業用の一輪車に載せて運ぶ。で、亜熱帯気候な上に道路も舗装されていないから水溜まりが多いんです。

ただ、牛は草に泥水がつくと食べないの、草を落とさないように兄貴と途中で何度も交代しながら、バランスの悪い砂利道や畦道の中を必死に押し歩いて歩きました。

家に着くと牛小屋の掃除をして、二、三時間ほど牛をトレーニングさせる。家に帰ってくるのは夜九時くらい。そこから宿題をするという毎日でした。さらに土日は、家業の手伝いで現場に行かされる。「働かざる者食うべからず」というのが親父の考えで、中学二年までそういう生活が続きまして。

——厳しい環境の中で、心身ともに鍛えられたのですか。

重田 ある意味で、牛に育てられたみたいなんです。実際この間もありましたけど、癡猛な牛は飼い主でさえ襲い殺すこともありますから。

うちの牛は特に大きくて、体重一トの横綱になりました。徳之島では、犬を散歩させるように牛を散歩させてトレーニングするんですけど、一回喧嘩すると勝負がつくまで離れないんですよ。大人でも引きずられて危ない。ところが、私は毎日寝食をとるにしているから、うに愛情込めて世話をしています。

だから、自分より何十倍も体重のある牛でも私の言うことを聞くんですね。力を合わす。そのくらい気持ち一つになっていました。生きた教育というんでしょうか。下手をすれば簡単に殺されるリスクを承知で、親父は私たち兄弟に牛の世話をさせた。いま同じことを自分の子供にさせると言われても私はできませんけど、そこでやっぱりどんな生き物でも愛情を持って接すれば、その気持ちは必ず伝わるのだと感じました。

——実に貴重な学びですね。

重田 ところが、私が十歳の時に親父は病気で亡くなりました。おふくろが会社を継いだんですけど、随分借金があったようで、荒くれ者が家に押しつけてくるやら、隣に住んでいた親戚からも苛められるやらで、おふくろは非常に辛い思いをしていたと思います。

私が夜中にトイレで起きると、障子ガラスの向こうに明かりがついていて、おふくろが起きてるんですね。飲めない酒を飲み、吸えないタバコを空ふかしして、仏壇に向かつて語っている姿を何度も目にしました。でも、私たち家族や近所の人、従業員、お客さんの